

こころ

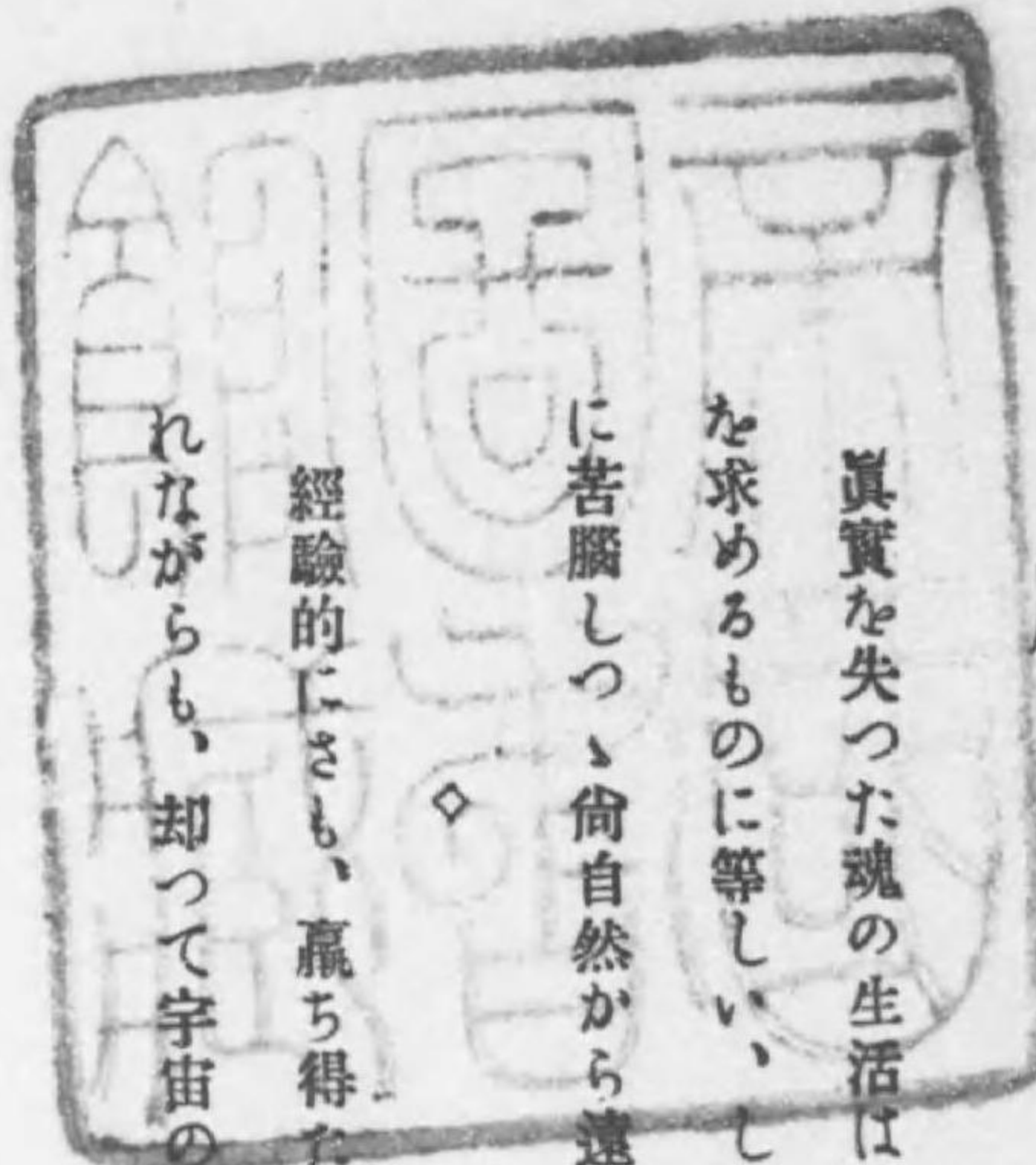
吉田徳義著



始



特 110
909



序にかへて

眞實を失つた魂の生活は自から苦惱の世界
を求めものに等しい、しかもそれ自身苦惱
に苦惱しつゝ、尙自然から遠ざかり行く。

経験的にさも、贏ち得たかの如くに考へら
れながらも、却つて宇宙の軌道を外れて運命

大正
14. 11. 17—
内交

の逆流に立ち迷ふ、かくして人は自からを見失ひ幻滅の悲哀を感じる。

◇
經驗以上に貴きもの、それは自己の衷に燃ゆる共感の實現である。

永遠性が自己を呼び覺す迄、そしてお前自身がそれを理解しようとして、拒み難い意志と力を差し向けるまで、お前は決して苦悶を訴へ

てはならない。

苦悶は靈魂にとつて罪惡である。

◇
自然は常に明るさ、眞實の表現である。而してそれは最少のものをも又最大のものに於ても同じである。

◇
常に新らしいもの、常に明るいもの、そし

て不斷の流れの中に一瞬時も停滯しない事物
それ等が魂を導く時にのみ私達は自己の力と
その自主の爲めの眞實の喜悅を感得すること
が出来る。

◇

自然を無視しようとする現在の生活の總て
は人間最大の墮落である。

◇

自然の驚異が再び私達の前に實證され、そ
の奇蹟を信する迄は永久に人生は暗の彷徨で
終るだらう。そしてそれを理解し得ない現代
人の悲惨な日常は、聽て自然の絶大の意志に
依つて反應する時代が到來するだらう。それ
でも尙人間が造り出した理屈を何處までも持
て遊ぼうとするだらうか。

◇

自然の中の自由な光を吸はれば凡ては虚無である。

大正十四年十月

著者

— 6 —

心

吉田徳義著

こころ

うちからのひかりが しづかに ひろがつて
ゆく かぎりなく

すべてのものが だんだんさ さうささをあ
らはしてくる

すべてのものに いひしれぬなつかしみさ

しんじつさが うごく
しんじつちからのひかりが ものみなのだま
しひな むすぶ

ふたつのでな ゆびをそろへて
ひさつにあはすと ふしぎなおさが ひびき
わたります
かぜに まぎれて そのひびきは かぎりも
なくながれて ゆきます
それは また なんこいふ ふしぎな ちか
らの はたらきでせう

その ひびきは いつまでも おほぞらたか
く また ちのそこふかく ながれこんでゆ
きます

それは——ふしぎな たましひの ひびき
ふたたび そのひびきは………
ものみな の うちを さほして
わたしの うち[。]に かへつて きます
どふしても きえない ひびき

ふたつのが あはされたとき
ものみな の たましひは こたへた
ふしぎな ひびき——こたへ
それは せかいの たましひの ひびき
ふしぎな まさまりのある
しん[。]そ[。]この ひびき
たつた ひさつ[。]の ちから
ひかり

◇
あなたの くるしみは あなたにとつて
だひとつの しんりである

◇
くるしみを かんじるこゝのできるひきは
しんりを かんじてゐるのよ おなじこゝで
ある

それは さうかい

◇
あなたが すべてである
しんりである

あなたの こゝろが あなたのせかいである
こゝろは かみである

あなたとせかいとは ひとつである

◇
ひとと ひと それは しんりの

かたりあひである

そして ひかりは さきりである

ひさは たゞしく かみである

かみは すべてをうむ

◇

わたしの すべては まるである

まるであるから はしがない

きれめがない きれめがないから

なやみがない

なやみで いつでもまるである

◇

こころのせかいが からだの せかいである

こころさ からだは ひさつである

みらいも かこも げんざいも みな

いまの わたしの うちにある

こんなにも さうさい わたしの

みであるがゆえ みらいの
ゑんりよはむだである

かんがへることは むだである

こころさへ すみきれるなら

そのかかみには みらいも

かこも みな うつる

それこそはえいごうのひかりである

◇

こころは むげんの いづみである
いづみのみづは たえず ながれる
ながれるみずは いつも うるはしい
いづみがいづめば こころがいづむ
せかいの したから いづみは つねに
かぎりない みづを すふ
そのみづが また せかいを
やしなつてゆく

こころがせかい

◇

すべて うごいてゐるものは

みな まるのかたちを ぶがいてゐる
せかいはまるである

うごくのは しんによつて うごく

うごくのは みな しんのちからである

しんの ちからは まるい

にんげんなみのめからは、それが

いろいろのかたちの はたらきに みえる

こころ ひらいて まるをみよ

◇

おひいさんは いつも ほくゑんでゐる

いつもく おなじすがたで それであて

すべてのものを うみだし やしなつてゆく

おひいさんの すがたは

を。ん。な。の。 た。ま。し。ひ。で。あ。る
を。ん。な。の。た。ま。し。ひ。は。 を。さ。こ。の。す。べ。て。を
う。ご。か。し。て。あ。る
を。ん。な。の。こ。こ。ろ。の。さ。ほ。り。に
を。さ。こ。が。 う。ご。き。あ。ら。は。れ。る

◇

「それは まあ なんといふさみしい
すがたなのです あまりにも みじめです

それ あんなに すんだ。くうきがある
あんなに あたゝかい ひのひかりがある
なんで それを もつこ すなほに
うけいれないのです」
う。ち。の。 さ。び。ら。を。ひ。ら。い。て。 ち。か。ら。い。つ。ば。い
す。ふ。な。ら。ば。 か。ら。だ。も
こ。こ。ろ。も。 ひ。こ。つ。で。あ。る

◇

そして じぶんもひさも ひさつである
それは すみきつたせかいである

◇
すき きらいが めいくのさだめである
それが めいくのせかいである
そして そのあらはれは しんりである
すき きらいは しんりのつかひである
すきも きらいも ひさつに みえたなら

それこそは しんりそのまゝの
すがたである
すきも きらいも しんのはたらきである
しんは ひさつである
しんを ちうしんに
はたらきは まるなぶがく
まるは せかいである

◇

◇

しごごを よろこんで できないのは

そのしごごが しんから

さほさかっているからである

そのしごごは むだの

しごごであるからである

しんじつ たましひの ための

しごごには めつたに つかれることはない

おひいさんが けつして つかれないように
しごごは そのものの いのちである

◇

しぜんは けつして つかれない

なぜなら それみづからが

すべてであるがゆえ

たましひがたちが ひこつであるとき

それは けつして つかれない

◇

ひささ ひとさ むかひ あつてゐる
さきだけが しんじつの せかいである
ひとりで こころに いろく

◇

かんがへるのは みな ゆめのせかいである
うまれるとき わたしは ひとりであつた
しぬときも ひとりである

◇

こころのはたらきが
みらいのやくそくである

◇

しぬさいふことは おほきいちゆうしんの
うんどうに くわよるこゝである

◇

にんげんのからだが しぬさいふことは

かたちをかへるこいふことである
からだをかたちづくつてゐるものが
たましひである

にんげんをこゝろすちからはたましひである
いかすちからもたましひである
しんだひさをつちにうづむさき
そのからだはたへずかはつてゆく
そしてしまひにはつちさなり

みづさなりいろくにかはる

そのかはるちからが

たましひのはたらきである

たましひはどこまでもほろびない

◇

からだこそそのからだをさりまいてゐる
ものをだいにすることはたましひを
だいにすることである

つまり すべてにたいして

ま。ん。ぞ。く。す。る。こ。こ。は。 い。ち。ば。ん。 た。ま。し。ひ。に
たいして し。ん。じ。つ。で。あ。る。こ。こ。で。あ。る

◇

「くるしい」—— さいふこきは

くるしみを な。ふ。て。あ。る。か。ら。で。あ。る

な。ふ。と。い。ふ。こ。こ。は。 に。げ。る。と。い。ふ。こ。こ。の
あひて である

わたしたちは くるしみを な。ふ。て。は。な。ら。ぬ
たづねては ならぬ

あなた じ。し。ん。の。う。ち。に さ。さ。り。を

ひらかねばならぬ

◇

このせかいで にんげんの に。く。た。い。ほ。ど
う。つ。く。し。い。も。の。は。な。い

なぜなら せかいの すべてのももの

いちばんじゆんすいな

せいぶんをもつてゐるから

にくたいがさういつされてゐるとき

それみづからがくわんぜんな

たましひである

にくたいがさういつされてゐないとき

にくたいはさういつしようとする

それがくるしみといふことである

まつたきからだは

まつたきこころである

◇

よろこんでゐるときよろこびが

つきからつきからくる

よろこびきはまんぞくのすむたである

たましひのよろこびは

からだのよろこびである

こころを

あかるくすることは せかいを あかるく
うつくしくすることである

◇

つまり にんげんの からだは
しんりの かたまりである

◇

じふんをあかるくすることは

しんりのひかりである

◇

おやはこである こはおやである
おやからは こがおやであり
こからはおやがおやである

つまり りのはたらき いんねんのさとりが
ほんさうの おやである

おやを だいじにして おやをたてて

にちく／＼とほることばは じぶんをいちばん
だいじに してゐることである
りがおやである

◇

みつこの せかいが いちばん なつかしい
わたしたちの しらない たくさんの
せかいを もつてゐる
みつこの せかいでは からだとこころが

まつたく ひこつである
みつこの せかいがしんじつ
かみのせかいである
みつこのそ わたしたちの
たましひの おやである
みつこの ひこみの かがやきは
すみきつた よるの そらの
ほしの すがたをも しのぐだらう

それは なんさいふ なつかしさ
したわしさ

みえ。ない。うつくしい ひかりである

◇

にんげんは ほかの どの いきもの
よりも まさつてゐる

どの いきものよりも

たましひが すんでゐる

にんげんは すきさほつた

みづでなければ

からだか やしなはれない

みづは たましひの

すがたみである

みづがに。こる。こ。いふ。こ。は

たましひの に。こりである

あなたの。う。ち。の。あ。ご。の。み。づ。

(やしなひのもさ)が
に。ご。る。こ。は。う。ち。の
た。ま。し。ひ。の。に。ご。り。で。あ。る
こ。の。み。づ。が。に。ご。り。き。つ。た。ら
に。ん。げ。ん。は。び。よ。う。き。す。る
び。よ。う。き。は。た。ま。し。ひ。の
ま。つ。た。か。ら。ぬ。す。が。た。で。あ。る
な。ん。で。も。か。ん。で。も。み。な

た。ま。し。ひ。の。さ。ほ。り。に
せ。か。い。の。い。ん。ね。ん。が。よ。つ。て。く。る
し。ん。じ。つ。に。ん。げ。ん。の。た。ま。し。ひ。は
す。ん。だ。お。つ。き。さ。ん。の
す。が。た。で。あ。る
に。ご。つ。た。み。づ。を。の。ん。で
い。き。て。あ。る。の。は
に。ご。つ。た。い。ん。ね。ん。の

みちである

それは にんげんの

たましひから

はなれてゆく

それは けものの

たましひである

いまのいまに いんねんの

さざりがある

◇

しぬさいふことは

たましひのくにに

かへることである

たましひは せかいである

そして あたらしく

せかいに うまれることである

しぜんによつて

し。ん。で。ゆ。く。こ。こ。は
い。ち。ば。ん。た。ま。し。ひ。に
ち。ゆ。う。じ。つ。な。こ。こ。で。あ。る

◇

に。こ。れ。る。た。ま。し。ひ。は
に。こ。れ。る。み。づ。に
か。へ。つ。て。ゆ。く
す。ん。だ。た。ま。し。ひ。は

す。ん。だ。み。づ。に
か。へ。つ。て。ゆ。く
そ。れ。が。せ。か。い。の
い。ん。ね。ん。で。あ。る
こ。こ。ろ。が。す。ん。だ。ら
み。づ。が。す。む

◇

ほ。ん。さ。う。に

かんがへるこ

いふことは

むだである

あすのひの

わからないいのち

そしていつ

うまれるといふ

やくそくもなく

このよに

うまれてきた

ふしぎな

からだである

それがはつきり

わかればせかいの

ところがおさまる

よのなが

すみわたる
にんげんは
かんがへることの
ちからのみに
しんじきつてゐる
かんがへてゐる
あひだは
ほんさうの

じぶんさ いふものは
くもの かなたに
おふはれてしまふ
たゞ いのちの
よろこびこそ
にんげんの
すべてである
しんじつの

いのちである

◇

こんばんは くらい

ちようちんが

なけりや

ゆけません

いえ いえ

おほしさまが

たくさん

ひかつて めます

そして……………

いまに

おつきさんが

にこやかに

ほしをみながら

おいでに

なるのですよ
さあ はやく
でかけませう

◇

にちにちに
めぐりあふ
そのものは
なんでしよう

それこそ

わたし じしんの

ほんさうの

すがたである

◇

つくさ ひくさの

このみちは

ふしぎな

ひとのよの

ただひとつの

ちからである

◇

かぜはせかいの

たましひである

◇

わたしの

こゝばではない

それはせかいの

こゝばである

わたしの

なやみではなく

それがせかいの

なやみである

それはわたしの

よろこびでなく

せかいの

よろこびである

——なんさいふ

ふしぎな

わたしで あらう

そして

さうさい せかい

まごころとは

しんじつ

こころである

それは

ぜん あく さいふ

こころの そこにある

だれでも

もつてぬる

しんそこの

たましひである

◇

まごころを

まごころをば

いつも そして

どんな まごころでも

ともに よりそふ

ものである

まごころは

たしかな しんりの

あらはれである

◇

まごころの

ちからが

すべてである

◇

あなたの

うちの

まごころが

あなたの

せかいを

まもつてぬる

にちにちに

◇

わたしの

みゝに おくる

いろいろの

おみや ことば

また わたしの

めに あたへる

いろいろの
いろや ひかり
それらは
たゞ わたしの
ものである
そして
それらと
おなじような

すべてのものは
みな わたしの
ものである
わたしを
さほして
それらは
まごころの
すがたを

ひらめかす
せかいの
ひとびとの
こころ
また その
あらはれた
さまさまの
かたち

それは
わたしの なかへ
へだてるものなく
じゆうに
はいつて きます
わたしは
それを りかいする
わたしは

まつたく
それらさ
ひきつに
なつて
わたしの
まごころを
ひらめがす
それが

しんじつ
わたしである
そして わたしは
あなたの
うち にある
わたしの
まごころは
わたしの ふれた

あなたの

うちにある

◇

そらを

みあげるさき

わたしの

せかいは

そらの うちにある

そして

かぎりもなく

それは

のびひろがる

また あるひは

うみを みるさき

うみの こころさ

さにもある

そのまゝの
すがたの うちに
しんじつの
わたしを しらしめ
また やしなつてゆく
わたしが
なんの
おもひも なく

たゞ そのまゝの
すがたが
すつかりで あると
するとき
すべては
やすやすと
なんの
かかわりも なく

はいつてくる
それは まるで
わたしたちの
まいにち
すふたり
はいたり してぬる
くうきの ように
かんがへも また

くるしみもなく
はいつてくる
そして おもひなき
すがたの うちに
いちばん
たいせつな
いのちが
たもたれてある

◇

まいにち

まいにち

わたしは

おひいさんさ

はなし

あつてゐる

そして わたしの

すべての ちからで

「わたしが

こそばを

かけようこ

おもつても

もし あなたが

きゝいれ なかつたら

わたしの　こまはは
むだである
そして　こまばの
しんりは
おほはれる
わたしに　こまばを
あたへて　くれるのは
あなたである

あなたの　ほかに
どこに　たっしい
わたしを
みるこまが
できるでせう
あなた　あつての
わたしである」

そのとき そのときに
あひあふ
あなたうち
それが わたしの
すべてである
はじめなく
をばりなき
そのとき そのときが

しんじつの
わたしの
いのちである
◇
はじめて わたしは
あなたに あつた
そして それが
さいしよで

また それが
を はり である
それゆえに
あなたは わたしに
いちばん したい
ものであり
かけがへの
ないものである

わたしの
ちからと いのちは
あなたの うちから
おくつて ぬるのです
◇
いちばん きよらかな
ひかりは
あなたや すべての

うちに しんじつの

わたしが あるさ

いふことを

おこなひの うちに

あらはす ことである

◇

ひさは しみ

なにごとも

ひさゆえに

さうさし

◇

たつた ひさつで

そして それが

すべて であるところの

じゅう かげりなき

じゅう さは —

わたしたちが
わたしたち
みづからの
ちからで
すべての ことが
あらはれてあり
また あらはれて
ゆくさ いふことを

さるる ことである
つまり なんでも
すべてが
わたしたち
みづからの
ことであるを
いふことの
ささりです

う。ち。か。ら。の。ひ。か。り



そ。し。て。そ。の
さ。さ。り。こ。そ
わ。た。し。た。ち。を
い。ち。ば。ん。の
じ。ゆ。う。に
み。ち。び。き。ま。す
◇
じ。ゆ。う。は

すくひたいさ

◇

おもふ ころは

かみ である

すくひを

もさめる

ころは

にんげんである

すくひたいさ

◇

おもふ ころは

すくはれてゐる

ころである

すくはれたいさ

おもふ ころは

いつまでも

すくはれない
こころである

すくひの

よるこびこそ

しんじつの いのち

すくひたいこ

いふ こころには

じぶんさ いふものが

かぎりなく

ひろく

おほきく

じゆうに のびてゐる

さもすれば じぶんが

ないように みえる

けれど その
ないように
みえる じぶんこそ
たしかな
じぶんである
そして しんじつの
じゆうである

↑

すくはれたい さいふ
こころ には
じぶんご
いふものは
せまい
かたくるしい
なかに
ちいまつてゐる

じぶんを
はつきり さそう
じぶんの せかいを
つくり あげよう
と するこ
かへつて それは
さびしい

ひさりの せかいに
おちてゆく ことになる

◇
すくはれたいさ
いふところ には
ささりはない
すくひたいさ
いふところにこそ

しんじつの さらりに
ひかりがある



すくはれたいこ
いふ こころは
くらやみの
せかいである
すくひたいこ

いふ こころは
あかるみの
せかいである



すくひたいこ
いふ こころは
すくはれたいこ
いふ こころは

それは ふたつきも
しんじつの
ころである
ひきつは
そら[。]を[。]みる
ころであり
いまひきつは
ちの[。]した[。]を

みるころである
そして すべて
このふたつの
あひだに
しんじつの
ひかりが うまれる
それが
しんじつの ちから

な
わ
り

この小冊子は

大正十年のくれに脱稿したもの
わたしがはたちのとき

しこのの、ひまぐくに

おもひ、うかぶまゝを

じゆんじよも、なく

かき、つゞけたもの

いまの、わたしのこころには

そのことばは

こぼりのやうに、

つめたく、かんじられる
けれど、たゞ
おもひを、こゝめるために
すぎしひの、
こころの、すがたを
なつかしみつゝ、
つくりだしたるもの

大正十四年十月二十五日印刷
大正十四年十一月五日發行

定價八十錢



著者 吉田徳義

發行兼印刷者 奈良市角振新屋町十番地
吉田徳義

奈良市角振新屋町九番地

發行所 奈良活版所

電話一〇七番
振替大阪一五六一六番

終

